

〔報告〕

我が国の救急看護に関する研究の動向と今後の課題

大西 敏美, 市原 多香子

香川大学医学部看護学科

Trends in Research and Future Challenges on Emergency Nursing in Japan

Toshimi Onishi, Takako Ichihara

School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University

要旨

我が国における救急看護に関する研究の動向を知り、今後の救急看護領域における課題を検討することを目的とする。

2009年から10年間で検索を行い、原著、症例検討、一般による文献検討を行った。523件を分析対象とし、山勢らの研究と比較するため、山勢らが用いたテーマ、【病態や処置の解説】【救急看護教育】【救急看護の専門性】【救急看護ケア】【その他】と、追加した【看護管理】に分類した。【病態や処置の解説】は減少し、【救急看護ケア】が増加していた。研究内容は、フライトナース、トリアージに関する文献が急増していた。フライトナースに関しては、複数施設あるいは、全国規模でフライトナースを対象として、継続教育も含めた教育体制の確立、心理的サポートの充実が必要と考えられた。トリアージに関しては、トリアージ能力の向上、トリアージ判定の事後検証システムの確立、その検証結果のフィードバック体制の構築やシミュレーションなどの勉強会を定期的に行うシステムの確立が求められた。家族援助では、看護師に対する終末期ケアの教育が示唆された。

キーワード：救急医療、救急看護、研究の動向、課題、文献

Summary

To clarify trends in research on emergency nursing and identify its future challenges in Japan, a literature review was conducted.

Original articles, case studies, and general reports published within the 10-year period from 2009 were searched for, and 523 papers were identified and analyzed. In comparison with a study by Yamase et al., they were classified into the themes used by Yamase et al.: [explanations of pathological conditions and care procedures], [emergency nursing education], [specialty of emergency nursing], [emergency nursing care], [others], and newly added [nursing management]. The number of papers examining [explanations of pathological conditions and care procedures] had decreased, whereas that discussing [emergency nursing care] had increased. When focusing on study contents, there had been a rapid increase in the number of papers on flight nurses and triage. According to these papers, it may be necessary to establish education systems, including those to provide continuing education, and offer more effective psychological support for flight nurses in several facilities or on a nationwide basis. Triage requires improving triage skills and establishing systems to examine triage assessments after the fact, feed the results of such examination back, and regularly hold seminars, such as simulation-based learning workshops. In family support, the importance of end-of-life care education for nurses was highlighted.

連絡先：〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1 香川大学医学部看護学科 大西 敏美

Correspondence to: Toshimi Onishi, School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University, 1750-1 Ikenobe, Miki-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0793, Japan

Key words: emergency medicine, emergency nursing, research trends, challenges, literature

はじめに

1987年からの10年間における日本の救急看護研究の内容と動向を検討した山勢ら¹⁾は、「救急看護が看護の新たな分野としての発展を遂げ、救急看護の独自性を確立することが課題である」と述べている。その研究以降、救急医療・救急看護を取り巻く状況は大きく変わってきた。救急医療とは、「発熱、腹痛、呼吸困難などの急病、事故や災害による外傷によって迅速な対応が必要な傷病者に対して医療を提供することを行う」²⁾。救急看護とは、看護学事典では、「病院の内外を問わず、あらゆる場面で生じる患者への救急処置が必要となる状況において実践される看護活動。突発的な外傷あるいは発病、慢性疾患の急性増悪などいわゆる急性・救急疾患を対象とすることが多い。主に救急医療の初療段階において展開される看護を指す」³⁾と定義されている。

我が国で救急医療を担っている場所が、救急医療施設である。救急医療施設は、1次救急医療から3次救急医療までの救急医療体制によって位置づけられた病院施設である。中でも、3次救急医療施設として救命救急センターは重症患者に対応する中心的役割を担っている。1977年に日本医科大学付属病院に、第1号の救命救急センターが設置され、2019年8月時点においては、全国に289の施設が認可されている⁴⁾。救命救急センターのような救急医療が専門的に展開される場には、救急看護を専門とする救急看護認定看護師が存在する。救急看護認定看護師は、救急医療の高度化に伴い、熟練した看護技術と知識を用いて、水準の高い看護実践を遂行するために育成され1997年に誕生するに至った。

船木ら⁵⁾は、「1990年代中頃まで病院前救護（以下、プレホスピタルケア）における看護師の活動はほとんど行われておらず、救急看護はインホスピタルケア（以下、病院を意味する）が中心であった」と述べている。その後、1995年の阪神・淡路大震災での救急搬送体制の不備から、厚生省は、救急医療用ヘリコプター（以下、ドクターヘリ）の試行的運行を行った。その結果、ドクターヘリを用いた救急搬送に伴い、救命効果と予後の改善の有効性が明らかとなり、2007年、ドクターヘリを用いた救急医療の確保に関する特別措置法が施行され、ドクターヘリが本格

的に運行開始となった。ドクターヘリには通常1名のフライトナースと呼ばれる看護師が搭乗し、医師とともに活動を開始した。この頃から救急医療は、プレホスピタルケアからインホスピタルケアに至る連続性と継続性によって成り立つものであるという考えに変化し、医師と看護師らは現場の働きを理解し、協働体制を構築していくこととなった。看護師らはプレホスピタルにおいて医師と共に傷病者の発生現場で活躍⁶⁾し、フライトナースとしての看護実践の内容や役割⁵⁾を報告するようになった。さらに2004年から規制されていた非医療者の自動体外式除細動器（Automated External Defibrillator；AED）の使用が可能となり、救急看護の役割は、地域住民に対するAEDの使用方法の講習などの院外活動へと拡大してきた。

2007年になり、救急医療における終末期医療に関する提言が発表されたことから、生命倫理、脳死や延命治療、代理意志決定支援、そして、患者や家族に対するインフォームド・コンセントや精神的サポートなど、様々な課題⁷⁾が生じることになった。さらに2012年には、全年齢層を対象とした、院内トリアージ実施料が新設され、トリアージの質が求められるようになり、トリアージナースの教育が急務となった。

以上のように、救急医療は、高度集中医療、社会の情勢に影響され、発展してきた。そこで本研究では、近年10年間のわが国における救急看護に関する研究の動向を概観し、1987年から10年間の文献検討を行った山勢ら¹⁾の研究結果と比較することで、近年の日本の救急看護領域の課題を明らかにすることを目的とした。

目的

本研究では、我が国における救急看護に関する研究の動向を知り、今後の救急看護領域における課題を検討する。

方法

1. 文献検索方法

文献検索データベースは、医学中央雑誌 Web を使用し、2009年から2018年までの10年間の、日本における『救急看護』をキーワードにして検索をした。

絞り込み条件の論文の種類から、原著・症例検討・一般で検索した結果、674件の文献が抽出された。それらをリスト化し整理した。次に、表題と要旨を読み、診療科が精神科と救急看護に関連のない文献を除外し、重複論文を除いた原著521件、症例検討2件、計523件を分析対象とした。

2. 分析方法

1) 研究の動向についての分析

過去10年間の文献を、研究数の年次推移、論文内訳推移ごとに分類した。

2) 過去10年間の救急看護に関する研究内容別分類

山勢らの結果と比較するため、分析対象523件を、山勢らが用いた5つのテーマ【病態や処置の解説】【救急看護教育】【救急看護の専門性】【救急看護ケア】【その他】を参考に分類したところ、看護管理に該当するものが多かったため、【看護管理】を新しいテーマとして追加し、最終的に【病態や処置の解説】【救急看護教育】【救急看護の専門性】【救急看護ケア】【看護管理】【その他】の6つのテーマに分類した。6つのテーマの内訳は、山勢らの研究と同様のカテゴリまで分類し、テーマ、カテゴリの分類作業は、研究タイトル、抄録を読み、研究者2名で検討し、結果の真実性の確保に努めた。

3. 倫理的配慮

文献引用時には、出典の明記を徹底し、分析時には、意味内容が変化することのないよう著作権を侵害しないよう努めた。

結果

1. 2009～2018年における救急看護に関する文献の年次別推移

2009年から10年間に、わが国において発表された救急看護に関する文献は原著521件、症例検討2件、一般0件、計523件であった。2009年に38件、2010年に28件、2011年に57件、2012年に54件、2013年に46件、2014年に55件、2015年に46件、2016年に67件、2017年に73件、2018年に59件であった(図1)。山勢らの研究¹⁾では、1987年から1999年までの10年間に、513件の文献が抽出されていた。2009年から2018年までの年次別推移から見えたこととして、毎年一定の報告がされ、山勢ら¹⁾と比較すると10件増えていた。

2. 過去10年間の救急看護に関する研究内容

救急看護領域の各年のテーマ別文献件数内訳を表1に、各年のカテゴリ別文献件数内訳を表2に示した。1987年から1999年と過去10年間(2009～2018年)の文献を比較するために、それぞれのテーマ別件数の比較を図2に、カテゴリ別件数の比較を図3に示した。以下【 】はテーマ、<>はカテゴリを表す。

救急看護領域の各年のテーマ別件数をみると、【病態や処置の解説】が2件、【救急看護教育】が72件、【救急看護の専門性】が49件、【救急看護ケア】が327件、【看護管理】が31件、【その他】が42件であった。【救急看護ケア】に関するものが、124件増加し、109件あった【病態や処置の解説】は、2件まで減少していた。以下に各テーマ別分類に沿って動向をまとめる。

1. 救急看護教育

【救急看護教育】について記述された文献は72件であった。【救急看護教育】は、<看護基礎教育>と<現任教育>の2つに分類され、<看護基礎教育>は21件、<現任教育>は51件みられた。その中には、<看護基礎教育>では、救急患者の模擬演習に関する研究⁸⁾や、メディカルラリーに関する研究^{9,10)}といった救急医療を実際に経験、体験する研究がみられた。また、救命救急センター見学実習や、その意義と効果についての研究¹¹⁾、救命センター看護師指導による簡易型一次救命処置(Basic Life Support; BLS)演習における看護学生への影響に関する研究¹²⁾がみられた。

<現任教育>では、教育対象者の所属が、救命救急センター(Intensive Care Unit; ICU含む)に勤務する看護師の文献が24件、病棟に勤務する看護師の文献が9件、外来に勤務する看護師の文献が6件、全看護師を対象とした文献が12件であった。<現任教育>では、救命救急センターへ配属された新人や異動者への教育にとどまらず、一般病棟を含めた看護職者への心肺蘇生法といった看護実践能力に関する研究¹³⁾が多かった。なかには、ラダーレベルを活用した看護師育成の効果についての報告¹⁴⁾もみられた。

2. 救急看護の専門性

【救急看護の専門性】は、<認定看護師に関するもの>9件、<認定看護師以外の看護師に関するもの>40件の2つに分類した。

<認定看護師に関するもの>は、過去10年間で9件の報告に留まり、認定看護師の看護実践能力¹⁵⁾、

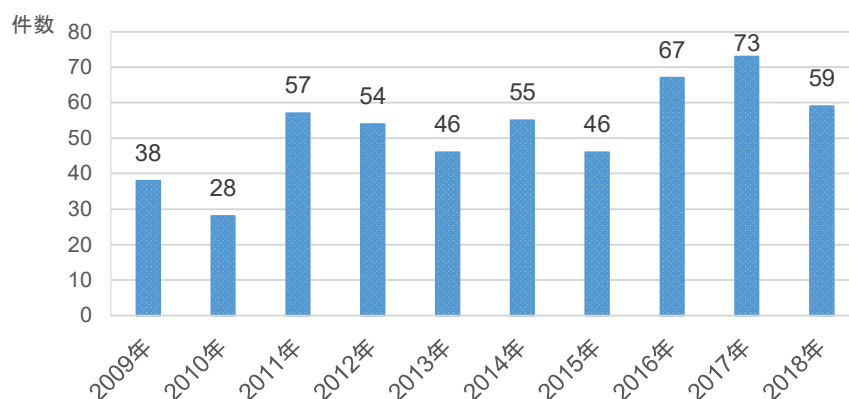


図1 文献数の年次別推移

表1 過去10年間（2009～2018年）における救急看護領域における各年のテーマ別文献数の内訳

テーマ	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	計
病態や処置の解説	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
救急看護教育	10	4	4	5	7	6	2	8	12	14	72
救急看護の専門性	5	0	5	4	4	6	5	9	6	5	49
救急看護ケア	18	19	40	38	28	38	29	42	40	35	327
看護管理	1	2	2	1	1	4	5	6	8	1	31
その他	4	3	6	6	6	1	5	2	7	2	42
計	38	28	57	54	46	55	46	67	73	59	523

表2 過去10年（2009～2018年）における救急看護領域における各年のカテゴリー別文献数の内訳

カテゴリー	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	計
病態や処置の解説			0	0	0	0	0	0	0	2	2
看護基礎教育		3	1	1	2	3	2	0	0	3	21
現任教育		7	3	3	3	4	4	2	8	9	51
認定看護師に関するもの		0	0	1	1	1	1	1	1	1	9
認定看護師以外の看護師に関するもの		5	0	4	3	3	5	4	8	5	40
特徴的な事例／看護技術に関するもの		5	2	5	9	4	9	3	8	8	60
家族援助		5	6	10	7	7	4	8	7	9	70
危機介入（精神的ケア含む）		0	1	2	0	0	0	1	1	3	9
プレホスピタルケア		0	3	2	3	1	3	3	5	3	27
トリアージ		1	2	6	9	9	9	8	6	7	60
インフォームド・コンセント		0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
災害看護		0	0	0	3	1	0	0	2	1	10
ナースのストレス・困難・思い		3	3	9	5	2	8	3	7	6	52
妊産褥婦・小児・高齢者の救急		4	2	6	2	4	4	3	6	3	38
看護体制・記録（ツール・マニュアル含む）		1	2	2	1	1	4	5	6	8	31
その他		4	3	6	6	6	1	5	2	7	42
計	38	28	57	54	46	55	46	67	73	59	523

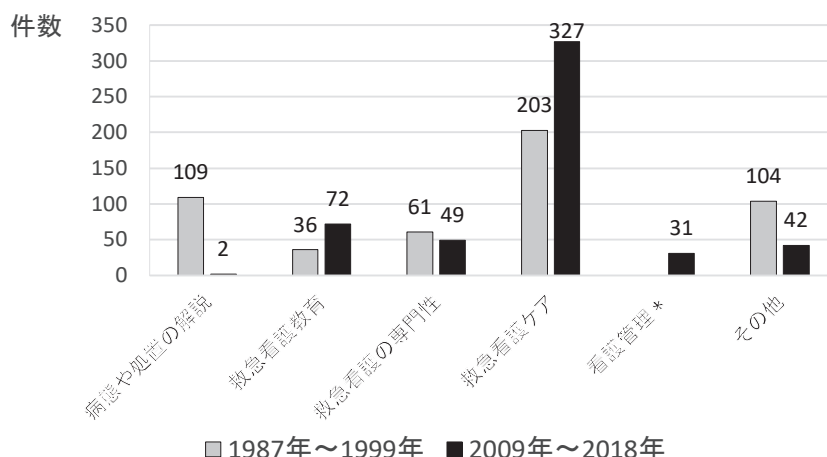


図2 山勢らのテーマ分類に沿った文献数 (山勢らの論文との対比グラフ)
山勢は文献1より引用 *山勢らのテーマ分類に看護管理を追加

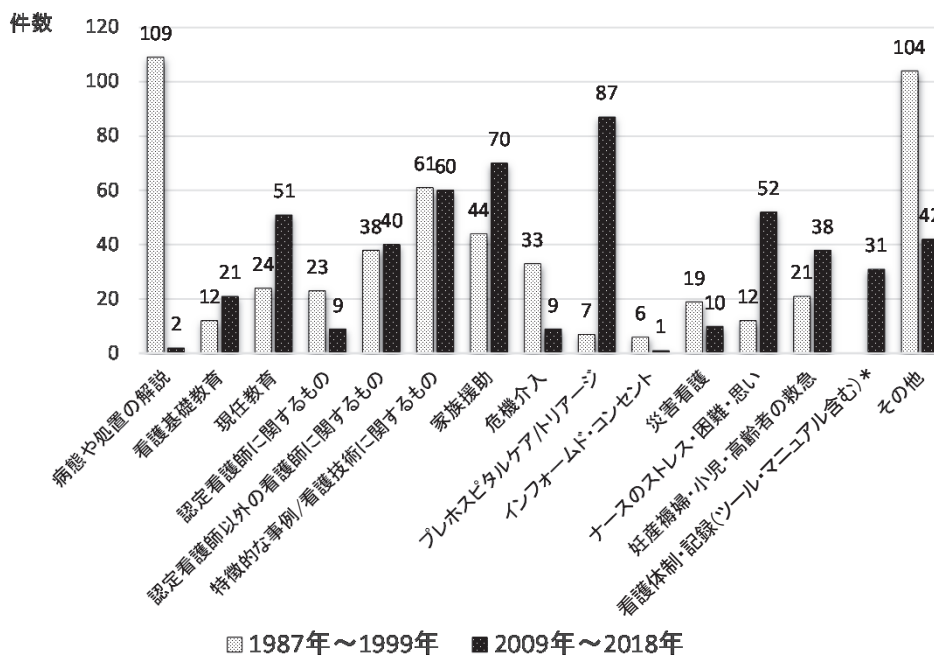


図3 山勢らのカテゴリー分類に沿った文献数 (山勢らの論文との対比グラフ)
山勢は文献1より引用 *山勢らのカテゴリー分類に看護管理・記録(ツール・マニュアル)を追加

小児救急看護認定看護師の活動報告に関する研究¹⁶⁾がみられた。

救命救急領域で働く<認定看護師以外の看護師に関するもの>は、救命救急の場で働く看護師がどのような考えに基づいてどのような看護ケアを行っているのかを明らかにすることを目的とした研究¹⁷⁾や、救急外来で必要とされる看護師のマネジメント能力を明らかにすることを目的とした研究¹⁸⁾など、看護師の機能や役割における報告が多くみられた。また、救急搬

送された患者の入院後に到達した家族への関わりに対する熟練看護師の看護実践¹⁹⁾、救命救急センターに勤務する看護師の自律性に関する質的検討の研究²⁰⁾もみられた。

3. 救急看護ケア

【救急看護ケア】のテーマについて記述された文献は、327件と最も多く報告されていた。327件の内訳と報告数は、<特徴的な事例/看護技術に関するも

の>60件, <家族援助>70件, <危機介入>9件, <プレホスピタルケア>27件, <トリアージ>60件, <インフォームド・コンセント (IC)>1件, <災害看護>10件, <ナースのストレス・困難・思い>52件, <妊産褥婦・小児・高齢者の救急>38件の9つに分類した。山勢らは、プレホスピタルケアとトリアージを1つのカテゴリーとしていたが、トリアージに関する研究が60件と目立っていたため、<プレホスピタルケア>と<トリアージ>をそれぞれ1つのカテゴリーとした。

【救急看護ケア】における<特徴的な事例／看護技術に関するもの>には、自殺企図目的患者への対応やケアの現状に関するもの²¹⁾、せん妄予防の取り組みに関するもの²²⁾、挿管中の患者の口腔ケア²³⁾、褥瘡ケア²⁴⁾、排便管理²⁵⁾、呼吸管理²⁶⁾に関する研究がみられた。

【救急看護ケア】における<家族援助>に関する研究の対象者は、看護師を対象とした文献が46件、家族を対象とした文献が17件であった。研究内容の中には、家族への看護援助の現状に関するもの²⁷⁾、終末期ケアに関する看護師の役割認識に関するもの²⁸⁾、終末期患者の家族に対する熟練看護師の看護実践に関するもの^{29, 30)}、代理意思決定への支援^{31, 32)}に関する研究がみられた。また、家族のニーズを明らかにするもの^{33, 34)}、患者家族の予期的悲嘆³⁵⁾がみられた。

【救急看護ケア】における<危機介入>に関する研究は、フィングの危機モデルを用いた事例^{36, 37)}、アギュララの問題解決型危機モデルを用いた事例³⁸⁾、山勢らの危機対処プロセスモデルを用いた事例³⁹⁾がみられた。

【救急看護ケア】における<プレホスピタルケア>に関する研究は、フライトナースに関する文献が15件、ドクターカーに関する文献が2件であった。その中には、フライトナースのストレスに関するもの⁴⁰⁾、フライトナースの育成や教育に関するもの⁴¹⁾、フライトナースの専門性に関するもの⁴²⁾がみられた。

【救急看護ケア】における<トリアージ>に関する研究の中には、トリアージの現状と課題⁴³⁾、小児救急医療におけるトリアージに関するもの⁴⁴⁾、トリアージ導入後の事後検証に関するもの⁴⁵⁾がみられた。またトリアージへの取り組みや課題に関するもの⁴⁶⁾、トリアージナースの心理面に焦点をあてたもの⁴⁷⁾もみられた。

【救急看護ケア】における<インフォームド・コンセント>に関する文献は、1件のみであった。カルテからインフォームド・コンセントに同席した看護師の

役割遂行を目的とした研究⁴⁸⁾であった。

【救急看護ケア】における<災害看護>に関する研究の中には、東日本大震災時に看護師が行った初動行動に関するもの⁴⁹⁾、災害時に備えた知識や技術に関するもの⁵⁰⁾、大規模災害時に備えた救急看護師育成に関するもの⁵¹⁾がみられた。

【救急看護ケア】における<ナースのストレス・困難・思い>に関する研究の中には、終末期ケアに関するもの⁵²⁾、急変時の救命処置に関するもの⁵³⁾、ストレス要因、ストレスへの対処法に関するもの⁵⁴⁾がみられた。その他には、勤務体制に関するもの⁵⁵⁾や新卒看護師が感じる困難と乗り越えに関するもの⁵⁶⁾、救命救急センターに勤務する看護師の蓄積的疲労に関する横断的な調査をしているもの⁵⁷⁾がみられた。

【救急看護ケア】における<妊産褥婦・小児・高齢者の救急>を対象にした文献は、妊産褥婦に関するもの5件、小児救急に関するもの22件、高齢者に関するもの10件であった。

妊産褥婦を対象とした研究の中には、分娩後大量出血の対応に関するもの⁵⁸⁾がみられた。小児を対象とした研究の中には、電話相談に関するもの⁵⁹⁾、虐待に関するもの⁶⁰⁾や急変時対応に関するもの⁶¹⁾がみられた。その他には、小児終末期医療の家族看護に関するもの⁶²⁾が1件みられた。高齢者を対象とした研究の中には、せん妄に対する看護の実態に関するもの⁶³⁾や、高齢者虐待遭遇の意識に関するもの⁶⁴⁾がみられた。

4. 看護管理

【看護管理】のテーマについて記述された文献は31件であった。その中には、フローチャートやチェックシートの活用による有効性に関連したもの⁶⁵⁾が12件みられた。

5. その他

【その他】は42件みられ、他のテーマにあてはまらない研究をまとめた。臓器移植に関する研究⁶⁶⁾、医師との連携に関するもの⁶⁷⁾がみられた。

考察

1. 日本における救急看護研究の年次推移

2009年～2018年までの10年間で、原著・症例検討は523件発表されていた。年次推移から、2011～2018年の8年間は46～73件の一定範囲で研究報告があることが言える。

1987~1999年までの救急看護に関する研究の動向と今後の課題を検討した山勢らの報告では、10年間で513件発表されていた。著明に増加しているとは言えないが、近年においても、毎年一定の報告があることがわかる。

2. 過去10年間の救急看護に関する研究内容の動向と課題

過去10年間(2009~2018年)における救急看護領域の各年のテーマ別件数をみると、【救急看護ケア】が327件、【救急看護教育】が72件、【救急看護の専門性】が49件、【看護管理】が31件、【その他】42件であった。【救急看護ケア】に関するものが、124件増加し、それにつれて、109件あった【病態や処置の解説】は、1998年から減少し始め、今回の調査ではわずか2件であった。減少した要因として、1990年代前半までは、救急領域でよくみられる病態や処置を医師が解説することが一般的であったことや、救急の初療は、診断と治療が並行して行われることが多かったため、看護者も重篤で複雑な救急患者の病態や処置を理解する必要があったためと考える。

【救急看護教育】に関しては、一般病棟を含めた看護師への心肺蘇生法といった看護実践能力に関する研究¹³⁾が多かった。また、看護師のストレスの中でも、急変に対する不安や一次救命処置に対する不安⁵³⁾が多かった。その背景には、厚生労働省が平成14年に提示した『看護学教育の在り方に関する検討会報告』では、臨地実習で看護学生が行う基本的な看護技術水準に救命救急処置技術は原則見学となっており、実施内容は各教育施設の裁量に任されている現状がある。つまり、就職時においては、看護師のレディネスには差があることを認識し、シミュレーション教育やBLSといった実技講習などを行う病院施設の教育プログラムの確立が求められる。また、<看護基礎教育>においては、救急の実態を知らないまま就職すると、リアリティショックの可能性が高まるため、救急看護の重要性を踏まえ、どのようなカリキュラムを構築していくのが課題として挙げられた。

【救急看護の専門性】に関しては、マネジメント能力¹⁸⁾、看護実践能力¹⁹⁾、看護師の機能や役割に関する報告が多かった。救急患者は、様々な場面で存在し、性別、年齢、症状、傷病の程度も多種多様であるため、幅広い知識が必要となる。また、救命の場面においては、高度な知識や予測性を伴った臨床判断力、他職種との連携に必要なマネジメント能力が必要となるため、これらの研究が多く実施されてきたと考え

る。しかし、インフォームド・コンセントに関する研究は、山勢らの報告時から増えておらず、わずか1件であった。特に、救急看護では、患者、家族は、医療者と信頼関係を築く間もなく、ケアを受けざるを得ない状況におかれている¹⁾。つまり、患者や家族が高度で複雑化している治療の説明を本当に理解できているのか確認するに至っていないと考える。必要に応じて補足説明を行うことが看護師に求められる役割の一つである。今後これらに関する実践を言語化していくことが求められる。

一方、【救急看護ケア】が増加した理由として、【病態や処置の解説】にとどまらず、自殺企図目的患者への対応²¹⁾や、せん妄予防の看護実践²²⁾、口腔ケア²³⁾、褥瘡ケア²⁴⁾、排便管理²⁵⁾、呼吸管理²⁶⁾といった特徴的な事例・看護技術に関する報告が増えたことが考えられる。しかし、看護ケアの報告にとどまっていたものが多く、今後は、実施した看護ケアの評価をしていくことが課題として挙げられた。

<家族援助>に関しては、救急医療の場では、家族も心理的な危機状態にあることが多く、家族への精神的サポートの重要性は、山勢らの報告時から、最も関心の高い研究領域の一つであり、今回の調査においても、最も多く報告されている。近年の<家族援助>に関する特徴的なものは、終末期ケアに関するものであった。その背景には、2014年に公表された救急・集中治療における終末期医療に関するガイドライン⁶⁸⁾があり、曖昧であった救急医療の終末期に関する大きな道標になったことが考えられる。以降、集中治療領域における終末期医療への関心は飛躍的に高まり、終末期にある患者家族へのケアにも焦点が当てられるようになった。しかし、これまでの救急領域での家族援助に関する研究では、家族のニーズやアセスメント^{33, 34)}の報告が多く、援助については次第に明らかとなってきているが、終末期ケアに関しては、多くの看護師は困難感やジレンマを感じていた⁶⁹⁾。日本のクリティカルケア領域では、治療を行う場であることから死を避ける風土があるとされている。そのため、クリティカルケア領域における終末期に関する教育は重要視されてこなかった。しかし、アメリカでは、終末期に関する<現任教育>として、The End-of-Life Nursing Education Consortium (以下ELNEC)という看護師が質の高いエンド・オブ・ライフケアを提供することを目的として、2006年にELNEC-Critical Careが開始された。日本では、2016年からELNEC-Critical Careの日本版が開始されたばかりである。このように、日本のクリティカルケア領

域における終末期看護に関する教育は、海外と比べて始まりが遅かった。そのため、クリティカルケア領域における終末期に関する教育は重要視されてこなかった経緯から、クリティカルケア領域における終末期ケアは困難感を伴う場面であるとされている⁷⁰⁾ことや、看護師のバーンアウトの一因⁷¹⁾ともされていることから、今後の教育の必要性が課題として示された。

次に、【救急看護ケア】が増加した理由として、山勢らの報告時には、＜プレホスピタルケア・トリアージ＞は7件であったものが、＜プレホスピタルケア＞が27件、＜トリアージ＞が60件に増加していた。＜プレホスピタルケア＞に関する研究の多くは、フライトナースに関するものであり、2010年から発表されている。これらの背景には、2007年の、ドクターヘリを用いた救急医療の確保に関する特別措置法の施行がある。2019年8月現在、全国43道府県に53機のドクターヘリが配備されており、その出動件数は年々増加していることから、ドクターヘリを用いた救急医療の提供は今後も促進されていくことが予測される。しかし、ドクターヘリは、限られた施設への配備であり、フライトナースの数が少ないことや、フライトナースの教育は各施設に任されていたため、フライトナースの育成や教育プログラムに関する研究⁴¹⁾、フライトナースのストレスに関するもの⁴⁰⁾が目立っていた。また、多くの研究は、1施設のフライトナースを研究対象としているため、フライトナースに関する課題は十分明らかになっていない現状があった。今回の結果から、今後は、複数施設あるいは、全国規模でフライトナースを対象として、継続教育も含めたフライトナースの教育体制の確立、心理的サポートの充実が課題として挙げられる。＜トリアージ＞に関しては、山勢らの報告ではほとんどなかった。山勢らは、「トリアージは医師という図式が出来上がっている。初療対応が救急看護の重要な部分であるならば、もっと多く取り組むべきである」¹⁾と述べている。その後、＜トリアージ＞に関する文献は2011年からみられ始め、今回の調査で大幅に増加している背景には、2012年度の診療報酬改定で、院内トリアージ実施料が新設され、2014年度からは、小児救急患者の院内トリアージ加算が導入されたことが大きいと考える。そのため、トリアージへの取り組みに関するもの⁴⁶⁾、トリアージ導入後の事後検証に関するもの⁴⁵⁾が多かった。なぜなら、我が国では、トリアージの歴史は浅く、統一された方法は確立されておらず、「トリアージの実践は担当する看護師の個々の裁量に任されている現状であった」⁷²⁾。そこに、2012年JTAS

(Japanese Triage and Acuity Scale) が完成したことで、＜トリアージ＞に関する研究の増加につながったと言える。今後は、トリアージ能力の向上、トリアージ判定の妥当性と信頼性を評価する事後検証システムの確立、その検証結果のフィードバック体制の構築やシミュレーションなどの勉強会を定期的に行うシステムの確立が課題として挙げられる。

【看護管理】に関する研究は、マニュアル作成⁷³⁾、対応の標準化⁷⁴⁾、フローチャートの使用⁶⁵⁾により、その有効性が報告されていた。また、患者の全身状態の把握が容易になったことや異常の早期発見が可能になっていた⁷⁵⁾。記録やマニュアルが統一化されることで、看護体制が整い業務効率が向上することにより、患者や家族に対して、心理的な面で充実したケアができるような体制づくりが求められる。

結論

日本の文献における救急看護領域のテーマ・カテゴリー別比較において、近年10年間と山勢らの研究を比較した結果、以下の結論を得た。

1. 医師による病態や処置の解説は大幅に減少し、救急看護ケアが大幅に増加していた。また、看護管理に関連した研究が増えていた。
2. 救急看護ケアが大幅に増加していた要因として、プレホスピタルケアやトリアージの急増がある。
3. プレホスピタルケアは、フライトナースに関するものが多くみられたが、フライトナースの数が少なく、課題は十分明らかにされていない。今後、複数施設あるいは、全国規模でフライトナースを対象として、継続教育も含めたフライトナースの教育体制の確立、心理的サポートの充実が必要である。
4. トリアージに関しては、トリアージ能力の向上、フィードバック体制の構築やシミュレーションなどの勉強会を定期的に行うシステムの確立が課題として挙げられる。
5. 家族援助に関する研究は多くされていたが、終末期医療におけるケアに対して、多くの看護師が困難感を抱いており、よりよい終末期ケアが提供できるように看護師に対する終末期ケアの教育の充実が求められる。
6. 看護管理に関しては、マニュアル作成や対応の標準化、フローチャートの使用の有効性が報告されていた。業務効率が向上することで、時間の確保ができる分、患者や家族に対して、心理的な面で

充実したケアができるような体制づくりが求められる。

本研究において開示すべき利益相反は存在しない。著者資格について、OTは研究の着想、データ収集、分析と論文作成を行い、その過程においてITからスーパーバイズを受けた。全ての著者が最終原稿を読み、承認した。

文献

- 1) 山勢博彰, 山勢善江: 救急看護に関する研究の動向と今後の課題, 看護研究, 33 (6), 451-465, 2000.
- 2) 山勢博彰: 救急看護論 (4版), 4, ノーヴェルヒロカワ, 2008.
- 3) 見藤隆子 (編): 看護学事典 (第2版), 214-215, 日本看護協会出版会, 2011.
- 4) 公益法人全日本病院協会: 全日病ニュース (平成30年7月15日), <http://www.ajha.or.jp/news/pickup/20180715/news03.html>, 2019/8/20.
- 5) 船木淳, 深谷智恵子: フライトナースの看護実践の構造, 日本救急看護学会雑誌, 17 (2), 1-11, 2015.
- 6) 石原晋: 救急医療の現状とプレホスピタルケア, 日本救急看護学会雑誌, 5 (2), 7-12, 2003.
- 7) 山勢博彰: 救急看護論 (4版), 28, ノーヴェルヒロカワ, 2008.
- 8) 寺島久美, 山岡深雪, 黒木瞳, 他: 看護教員による救急看護模擬実演の成果, 宮崎県立看護大学研究紀要, 17 (1), 1-10, 2017.
- 9) 森山美香, 秋鹿都子, 吉野拓未: 大学祭で開催されたメディカルラリーに参加した医学生と看護学生の学び, 島根大学医学部紀要, 39, 9-13, 2017.
- 10) 黒田梨絵: 茨城県と東京都で開催されたメディカルラリーを見学した看護学生の学び, 健康科学大学紀要, 14, 163-172, 2018.
- 11) 古市清美, 益子直紀: 救命救急センター実習における看護学生の学習経験, ヘルスサイエンス研究, 18 (1), 89-92, 2014.
- 12) 白井里佳, 新開裕幸, 呉聖人, 他: 救命センター看護師指導による簡易型BLS演習における看護学生への影響 臨床と大学とのユニフィケーションによる効果, 大阪大学看護学雑誌, 17 (1), 17-24, 2011.
- 13) 本家淳子, 長谷川瑠理, 山岡かほる: 看護師に対する急変対応シミュレーション教育の現状と課題, 磐田市立総合病院誌, 19 (1), 49-53, 2017.
- 14) 竹川亮子, 高橋亜紀子: 救急部部署リーダーレベルIIIを活用したリーダー看護師育成の効果, 山口県看護研究会集録集, 15, 41-43, 2016.
- 15) 森島千都子, 當目雅代: 救急看護認定看護師の救命救急対応における看護実践能力の構造, 日本クリティカルケア看護学会誌, 12 (1), 49-59, 2016.
- 16) 齋藤香澄: 小児救急看護認定看護師としての活動報告と今後の課題, 浜松医療センター学術誌, 5 (1), 92-94, 2011.
- 17) 河合正成, 高原美樹子: 救命救急の場で働く看護師が実践する看護ケア, 日本救急看護学会雑誌, 20 (2), 16-24, 2018.
- 18) 石丸智子: 救急外来部門における看護師のマネジメント能力測定尺度の開発, 日本救急看護学会雑誌, 19 (1), 33-41, 2017.
- 19) 町田真弓, 中村美鈴: 救急搬送された患者の入院後に到達した家族への関わりに対する熟練看護師の看護実践, 日本クリティカルケア看護学会誌, 12 (3), 11-23, 2016.
- 20) 大江理英, 杉本吉恵, 簗持知恵子, 他: 救命救急センターに勤務する看護師の自律性に関する質的検討, 大阪府立大学看護学雑誌, 23 (1), 11-20, 2017.
- 21) 青木好美, 片山はるみ: 救急業務に従事する看護師の自殺未遂患者に対するケア遂行の現状, 日本看護科学会誌, 37, 55-64, 2017.
- 22) 上川知広, 中里さかえ, 杉田恵美, 他: 緊急入院患者に対するせん妄予防の取り組み, 福岡赤十字看護研究会集録, 54 (30), 5-7, 2016.
- 23) 城詰和貴, 野口杏実, 服部拓也, 他: 救命救急センターにおける挿管患者の口腔ケア標準化に向けた取り組み ケア定着のための複合的介入, 川崎市立川崎病院看護研究集録, 72, 21-26, 2018.
- 24) 生駒志帆, 立花弘子, 佐白智恵子, 他: ブランケットマット使用時における褥瘡発生リスクの検証 体位別毎の体圧とずれに焦点をあてて, 日本看護学会論文集: 成人看護I, 44, 43-45, 2014.
- 25) 小野愛梨, 田口裕紀子, 五百蔵三奈: 循環器系疾患による心停止蘇生後患者と大量水様便の関連性 PCPS・IABP管理中における排便管理方法の一考察, 日本救急看護学会雑誌, 20

- (2), 1-6, 2018.
- 26) 坂脇英志, 佐藤昌太, 葛西毅彦, 他: 急性呼吸窮迫症候群に対する長時間腹臥位療法の新規導入, 函館医学誌, 42(1), 17-20, 2018.
- 27) 西城瑞季, 小暮佳奈, 周東久美子: 初療における家族ケアの現状調査からみえた課題 より良い家族ケアを目指して, 群馬県救急医療懇談会誌, 13, 67-69, 2017.
- 28) 石川幸司, 加瀬加寿美, 川端和美, 他: 集中治療領域における終末期ケアに関する看護師の役割認識と課題, 日本集中治療医学会雑誌, 23(5), 601-604, 2016.
- 29) 佐竹陽子, 新田紀枝, 浦出紗希: 三次救急外来における終末期患者の家族に対する熟練看護師の看護実践, 日本救急看護学会雑誌, 17(2), 24-34, 2015.
- 30) 江尻晴美: ICU熟練看護師がICU終末期患者の家族とのかかわり方を習得して実践するプロセス, 日本救急看護学会雑誌, 19(1), 12-20, 2017.
- 31) 吉田紀子, 中村美鈴: クリティカルケア熟練看護師が見出した延命治療に関する家族の代理意思決定を支える看護実践, 日本救急看護学会雑誌, 16(2), 1-12, 2014.
- 32) 桑原美香, 藤浪千種, 森一恵: 救急初療に勤務する看護師の代理意思決定支援における困難な状況, 日本看護学会論文集: 急性期看護, 48, 3-6, 2018.
- 33) 内村由美子, 中村佑加, 濱田華子, 他: クリティカルケアでの家族のニードと看護師が捉えたニードの比較 重症・救急患者家族アセスメントツール(CNS-FACE)を用いて, 中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌, 11, 307-310, 2016.
- 34) 田川奈津代: クリティカルケア領域における家族看護 CNS-FACEによる家族のニードとコーピングの実態と介入の有効性, 北見赤十字病院誌, 5(1), 10-13, 2017.
- 35) 岡林志穂, 森下利子: 救急外来で予期せぬ死を経験した家族の悲嘆へのケア, 日本救急看護学会雑誌, 20(1), 1-9, 2018.
- 36) 石井汀: 緊急入院にてストーマを造設した患者への看護介入 障害受容に対する効果的な看護介入とは, 川崎市立川崎病院事例研究集録, 17, 21-24, 2015.
- 37) 寺井晴香: 急性期患者への精神的ケア 脊髄損傷患者との関わりから学んだこと, 川崎市立川崎病院事例研究集録, 20, 21-24, 2018.
- 38) 宮崎絵梨香, 星野康子, 青木亜希子: 救急外来における脳梗塞急性期患者家族への関わりを振り返った一例 心理的な危機にある家族への看護と今後の課題, 群馬県救急医療懇談会誌, 13, 72-74, 2017.
- 39) 小澤康子, 梶麻乃, 高橋貴子: 緊急入院患者が代理意思決定から意思決定に移行できた過程の一考察, 川崎市立川崎病院看護研究集録, 70, 9-12, 2016.
- 40) 黒田梨絵, 三木明子: 救命救急センターに勤務する看護師のプレホスピタルケアで経験する出来事と職業性ストレス フライトナースと救急看護師の比較を通して, 日本看護学会論文集: 看護管理, 42, 398-400, 2012.
- 41) 山根裕子, 清水ゆかり, 三島美幸, 他: 島根県ドクターヘリにおけるフライトナース養成教育とフライトナース教育の現状と今後の課題, 日本航空医療学会雑誌, 16(3), 24-29, 2016.
- 42) 宮崎博之, 坂本祐子: 本邦ドクターヘリ基地病院におけるフライトナースの専門職的自律性, 日本救急看護学会雑誌, 20(2), 7-15, 2018.
- 43) 玉木善光, 徳永貴子: 救急外来トリアージの現状と標準化のための課題, 長野県看護研究学会論文集, 33, 88-90, 2013.
- 44) 主海幸子, 藤丸有加, 中尾美譽子, 他: 小児科外来におけるトリアージシステム導入の試みと有用性, 日本看護学会論文集: 看護総合, 44, 213-216, 2014.
- 45) 青野由佳, 島田佐苗, 藤井美子, 他: 救急外来トリアージの事後検証と今後の課題, 香川労災病院雑誌, 20, 47-49, 2014.
- 46) 金澤奈美, 山本里恵, 丸山奈美, 他: 救急外来におけるトリアージ判定スキルの維持・向上に向けた活動と課題, 名寄市立病院医誌, 24(1), 81-83, 2016.
- 47) 桐本ますみ, 高見沢恵美子, 石田宜子: 二次救急外来の成人患者の電話トリアージで看護師が感じる困難と対処および影響要因, 日本救急看護学会雑誌, 19(2), 1-8, 2017.
- 48) 中畑加奈子, 一木麻里: 看護記録からみた救命センターでのインフォームド・コンセントに同席した看護師の役割遂行の現状, 日本看護学会論文集: 成人看護I, 44, 19-22, 2014.
- 49) 原島有希枝, 荒牧敦子, 中村香織, 他: 看護師が

- 災害発生時に行った初動行動調べ アンケート調査より, 群馬県救急医療懇談会誌, 8, 51-53, 2012.
- 50) 杉本寿代, 品川由里, 亀井尚志, 他: 救急外来看護師の災害看護初期対応に関する知識・技術習得に向けた取り組み 災害研修会の導入を試みて, 京都府立医科大学附属病院看護部看護研究論文集, 2016, 33-37, 2018.
- 51) 土屋一子, 豊村昌代, 真銅圭子, 他: 赤エリアで対応可能な救急看護師の育成に向けた課題 多数傷病者受け入れ訓練後のフォーカスグループインタビューより, 九州救急医学雑誌, 17 (1), 13-19, 2018.
- 52) 原田竜三, 山勢博彰, 千明政好, 他: 初療室で亡くなる患者・家族への看護実践における看護師の感情, 東京医療保健大学紀要, 9 (1), 9-16, 2014.
- 53) 村田優子, 園田悦代: 看護師の一次救命処置に対する不安要因に関する基礎的研究, 京都府立医科大学看護学科紀要, 26, 29-36, 2016.
- 54) 高野真意, 安宅真理, 山本明奈: 2次救急における看護師のジレンマ その場面での考え・対応を看護師のインタビューから, 日本看護学会論文集: 急性期看護, 47, 11-14, 2017.
- 55) 笠原理絵子, 植木奈保子, 佐藤真実: 救急室で救急室専属看護師と当直勤務をする各科外来看護師が感じるストレスの内容, 日本看護学会論文集: 看護管理, 46, 235-238, 2016.
- 56) 北島里紗, 大木友美: 救命救急センターの新卒看護師が感じる困難と乗り越えに関する研究, 昭和大学保健医療学雑誌, (12), 45-53, 2014.
- 57) 中井夏子, 門間正子: 北海道の救命救急センターに勤務する看護師の蓄積的疲労に関する横断的調査, 日本臨床救急医学会雑誌, 17 (1), 1-10, 2014.
- 58) 蓑田友美, 嶽本さおり, 森妙子, 他: 産科危機的出血時の対応 看護師・助産師の役割, 熊本県母性衛生学会雑誌, 18, 11-14, 2015.
- 59) 伊藤恵子, 川口伊津子, 長田里美, 他: 夜間救急外来の電話対応による小児の重症度把握, 福島県農村医学会雑誌, 51 (1), 45-46, 2009.
- 60) 加瀬多恵子, 鳥潟美花, 日下喜久江: 救急外来での虐待の早期発見に対する取り組み 看護師が虐待の視点を持ち関わるための工夫, 旭中央病院医報, 36, 49-51, 2014.
- 61) 根本祥子, 大島真奈, 神田智恵美: 小児病棟における救急対応のトレーニング導入の効果 アルゴリズムを活用して, KKR 札幌医療センター医学雑誌, 15 (1), 59-64, 2018.
- 62) 小沼睦代: 救急・集中治療における小児終末期医療の家族看護, 脳死・脳蘇生, 28 (2), 123-128, 2016.
- 63) 鈴木智子, 鈴木みずえ, 宮崎良子, 他: 緊急入院した高齢患者に対するせん妄予防を目的とした看護を振り返る タクティールケアとリアリティ・オリエンテーションを用いた実践, 認知症ケア事例ジャーナル, 9 (1), 30-39, 2016.
- 64) 大津山優葵: 看護職の高齢者虐待遭遇の可能性の意識とその関連要因について, 子どもと女性の虐待看護学研究, 5 (1), 33-42, 2018.
- 65) 吉田真紀, 大木亜紀, 島美貴子: 外傷看護チェックシートの運用による効果と課題, 日本臨床救急医学会雑誌, 20 (3), 508-515, 2017.
- 66) 田村南海子, 塚本尚子: 脳死下ドナー家族への看護ケアに関する実態調査 看護師の看護ケアに対する必要性の認識と実施率, 日本救急看護学会雑誌, 20 (1), 10-19, 2018.
- 67) 吉野暁子, 高平修二, 根本学: 救命救急センター外来における患者安全 処置時タイムアウトに関する実態調査, 日本救急医学会関東地方会雑誌, 38 (2), 220-222, 2017.
- 68) 日本救急医学会, 他: 救急・集中治療における終末期医療に関するガイドライン—3学会からの提言. http://www.jaam.jp/html/info/2014/pdf/info-20141104_02_01_02.pdf, 2019/8/20.
- 69) 佐竹陽子, 荒尾晴恵: 救急領域で終末期ケアを実践する看護師が抱く葛藤, Palliative Care Research, 13 (2), 201-208, 2018.
- 70) 江尻晴美, 片岡秋子: わが国のクリティカルケア領域における終末期看護研究の動向, 日本救急看護学会雑誌, 16 (1), 1-9, 2014.
- 71) 原田竜三, 山勢博彰, 千明政好, 他: 初療室で亡くなる患者・家族への看護実践における看護師の感情, 東京医療保健大学紀要, 9 (1), 9-16, 2014.
- 72) 鈴木久美子, 中村恵子, 安保弘子, 他: トリアージナースの育成について 看護師による救急外来トリアージの実態, 日本臨床救急医学会雑誌, 13 (5), 626-631, 2010.
- 73) 吉野大智, 中里さかえ, 研井礼子: 胸痛を主訴に来院したウォークイン患者への対応 急性心筋梗塞患者初期対応マニュアル作成後の取り組み,

福岡赤十字看護研究会集録, 55 (31), 14-17, 2017.

- 74) 宇城幸恵, 加藤孝明, 羽田野かずみ, 他: 超急性期脳卒中患者に対する救急外来での初期対応の取り組み, 広島市立広島市民病院医誌, 33 (1), 65-68, 2017.
- 75) 野寄真紀, 有田智香, 村上貴子: 救急外来における脳卒中初期評価シート導入の効果, 九州救急医学雑誌, 16 (1), 6-12, 2017.